

幼児の笑いとその保育における意味(1)

一歳児の笑い

友 定 啓 子



はじめに

保育の中で、「笑い」は特別な位置を占めているように思う。子どもの表情から笑いが失われると、不安定なものではないかと心配になるし、反対に子どもたちが保育者の行為に笑顔でこたえてくれると安心する。時には保育者自身が子どもに笑顔を向けられず苦悩することもある。このように「笑い」はその子自身の状態や子どもと保育者あるいは子ども同士の関係のひとつの指標であることを私たちは直感的にとらえている。

また、発達とともに子ども自身の中で「笑い」の意味が豊かに広がっていく。新生児の生理的微笑から始まって、年長児では他者を笑うことを知り、また笑うことによって自分の失敗を乗り越えていくなど、成人に近い笑いの機能を獲得するに至る。私は、乳幼児期においてこの「笑い」がどのように変化発達していくか、笑いは子

どもにとつてどんな意味を持っているのか、さらにその保育における意味を明らかにしたいと考えた。

その発達変化のようすを追うために、保育所の一クラスにこの数年間参加観察のために定期的に通い続けた。一九八五年から一九九一年までの六年間である。原則として毎週一回午前中のみで観察総日数は二〇九日であった。対象になった子どもは一九八五年度に一歳児クラスであった二四名である。その子どもたちが卒園するまで観察を継続したが、その間園児数の増減があり最終的にはのべ三三名になった。このなかで五年間観察を続けた子どもが一二名、四年間の子が三名、三年が六名、三年未満が一〇名である。その後一九九〇年度の〇歳児のクラス一四名の追加観察をした。

観察記録の中から「笑い」に関連する記録を取りだし整理・考察を加えた。その時に「笑い」として取り上げたものは、声を出して笑う・ほほえむなどを初めとして自然に子どもを見ていて「笑った」と思えるものを取り上げている。満足の表情、得意の表情、恥ずかしさの表

情なども含めることにした。考察はどんな状況で笑いが起きているかを中心に行った。

この連載ではまず一歳児からスタートして五歳児までいき、最後にまた〇歳児にもどることにさせていただきたい。そして、ここでは特に子どもにとっての意味、保育における意味について考えていきたいと思っている。

一、笑いの三つのレベル

一歳児で見られた笑いを大別すると次の三つである。

第一は、生理感覚的快あるいは緊張に伴うもので触覚と運動感覚が大部分を占めている。第二は、認識作用に伴うもので、未知の体験を受容する際に生ずるものである。第三は、他者との交流に関連したもので、親しみの表現としての笑いである。第一の笑いを身体レベルの笑い、第二を認識レベルの笑い、第三を社会レベルの笑いと名づけることにする。

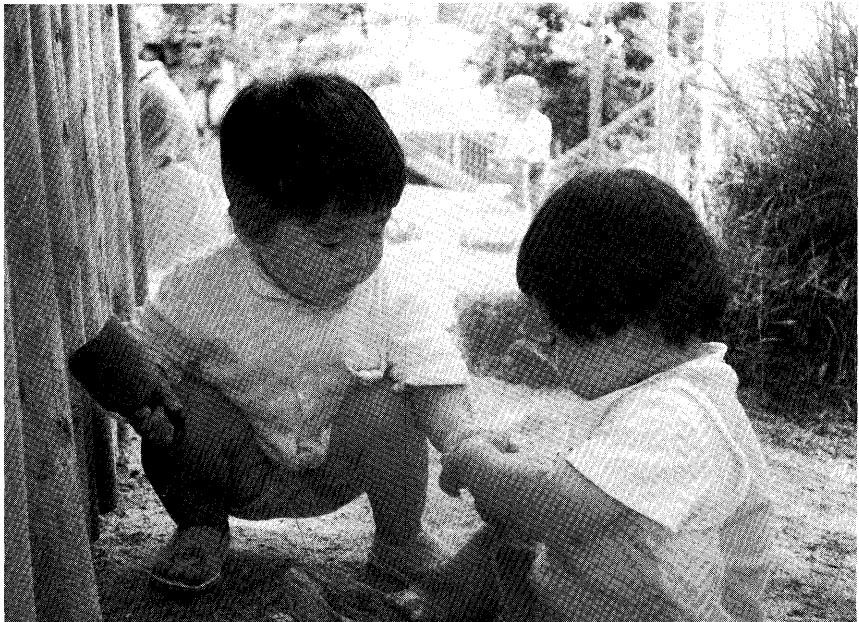
二、身体と笑い

身体レベルの笑いとは、くすぐり合いや冷たい水に触れたときのはじけるような笑いのように直接身体に関連したものである。また、歩く、走る、すべり台からすべり下りるなどの運動に伴って生じる笑いである。これらの笑いは運動による緊張や感覚的緊張の解消という作用を持っている。ただこれは単なる生理的快感とはいえない面を持っている。ただこれは冷たい水のなかに入っても、おびえて立ちつくす人もいれば、歓声をあげてはしゃぎ回る人もいる。その子がそれを受容しているかどうかというところに影響を受けていると思われる。

一歳児に限らず、水遊びや泥遊びなどを十分に楽しむようになった後、いろいろなことに自信を持って取り組むようになったという幼児の姿がよく見られる。これはその子なりに、自分の身体に対する理解や自信を持っていたということに関連していると思われる。

三、「わかる」ということ

認識レベルの笑いとは、一言でいえば「理解」に伴う



笑いである。何かがわかることがうれしいのである。

△記録Ⅰ▽

キャラクターシールをはがして画用紙に貼るといふ活動をする。M子、台紙からシールをはがせない。私をはがしてもたせるが、のりのついた面を上に向けたまま貼ろうとするので、指にくっついたままで貼ることができない。それでも、指を何度か動かしているうちに偶然シールが裏返ってくっつく。それを何度か繰り返す。いっこうにスピードが上がらないので、私はM子の目の前でゆっくりシールをひっくりかえして貼るといふ動作をして見せた。M子はそれを見てニコッとほほえむ。次から間違ひなくまるでこんなことはじめから知っていたというふうには貼りつけていく。

(一九八五・一二・一九)

私はこのM子のほほえみが印象深かった。「腑に落ちた」といふ感じがしたのである。それまで混乱し困惑していたところへ、一つの枠組が与えられて自分のするこ

とがあきらかになったのではないかと思う。

林竹二は『教育の根底にあるもの』の中で次のような中学校の実践例を報告している。²⁾「彼の教室に、算数の最も不得手な佐藤君というのがいて、角と角の関係についての理解がどうしてもできないでいるんです。△中略▽それで、きょうの時間は佐藤の時間にしてやろうというので、徹底的に佐藤君にかかわり続けたんですね。いろいろに問題を出し、答を吟味して、やっていくうちに、佐藤君がある瞬間にこつと笑ったんです。そのにこつと笑ったあと書いた字がこちらです。それから、そのにこつと笑う前に書いた字がこれです。これは同じ時間の中のことだそうです。だから、そういうふうに、ああこうだったのかということが腑に落ちる、これでやっとなに字までを変えてしまうわけですね。これは算数であるだけに非常に貴重な証拠になると思いますね。」

私たち大人も何かがわかったときうれしい。「わかった!」と感じたとき、きつと笑顔が出ているのだろうと

思う。一歳児はこの世に出てきて間もない。わからないこと、未知のことだらけである。意味がとれないことが多くあるにちがいない。そんなふうになると、次の三つの記録も納得できる。

△記録2▽

先生が、テーブルにいた子どもたちの前に、ハンドバッグの中からシャボン玉液を取り出して、目の前でふくらませて見せる。ところが、みんなきょとんとしている。何回かふくらませてしばらくしてからようやく、さわるうと手を差し出す子が出てくる。偶然一人の子どもの手に触れてシャボン玉が消えた。子どもたちは何が起こったかわからないような顔をしている。

(一九八五・五・一七)

△記録3▽

その三〇分後、裏門に集合した子どもたちが後から来る子をお待っている間、私はシャボン玉を吹いて見せた。それを見てC子が興奮したように笑う。女兒L子、M子などがスト

ローの先をみつめて、ふくらんで出てくるシャボン玉に手を出す。

(一九八五・五・一七)

次の記録はこの約一カ月後である。

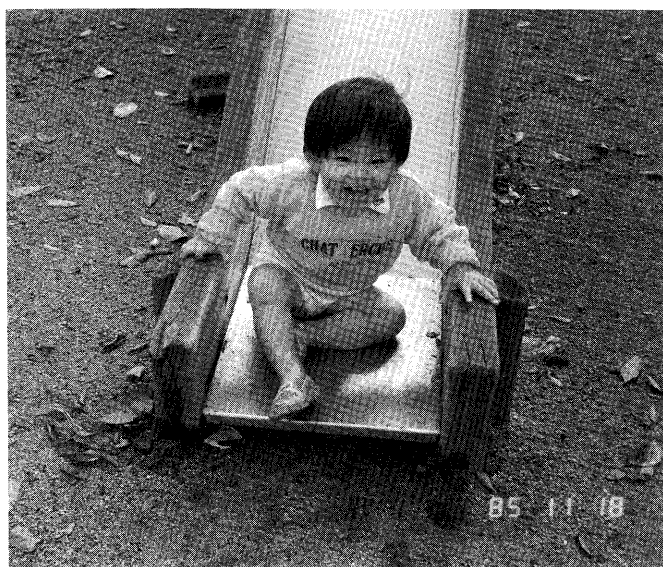
△記録4▽

先生はまたシャボン玉を取り出してやって見せた。このときはすぐに「もっかい! もっかい! (もう一回)」と叫び声が出て「ワアーツ、ワアーツ」と大歓声。シャボン玉がストローの先から始めると、一心に見つめている。その後、両手を差し出してつかもうとする子、立ち上がってほーっと見つめる子、椅子に座ったまま首だけ上方を見つめている子など様々であった。シャボン玉の動きを見て「あ(お)ちた」という言葉も出る。D子は両手を重ねて差し出し「ちようだい、ちようだい」という。

(一九八五・六・二八)

子どもなりに、これから起こることがわかったとき、安定してその体験を楽しむことができるのであろう。

ただ、その「わかる」というのは、決して大人の思う



ような「理解」ではなく、前言語的な理解であると思われる。例えばすべり台をすべる時、ある子どもはすべり下りる前にここにこしている。ところが別の子どもはすべり下りる前は真剣そのもので、すべり終わってにっこり笑う。前者のほうが熟達している子どもである。これも一つの「理解」があるかどうかに関連している。この場合は運動感覚的な理解であろうし、大丈夫といった安心感のようなものでもあろう。シールはりの場合は「こすればこうなる」という壮途的なものであるし、あいさつなどできっこりできるかどうかは「この人は知っている人」という認知のようなもので名前や関係を理解しているとは限らない。

そうなると、保育として考えておきたいことは、この前言語的な「わかる」という体験を大事にしておくことである。私は初めのシャボン玉の記録では保育として失敗ではないかと思った。子どもたちが受け入れてくれたように思えなかったからである。しかし、その後の記録を見ればこれは必要な体験だったということがわかる。

四、他者を受け入れる

一歳児で大事にしたいことのもうひとつは、笑顔がことばを持たない彼らの重要な自己表現の手段であるという点である。ここでは他者との交流を社会レベルの笑いとして考えているが、これは年齢が上がるにつれて、明確な自己認識や他者認識、それに集団認識というものにつながっていくからである。一歳児ではその中でも、他者を受け入れることが主要なテーマである。子どもは自分の周りにいる人に気付き始める。その人々が次々と自分にかかわってくる。見知らぬ人であれば警戒するし、よく知っている人であれば笑顔で受け入れる。自分からも親しみをよせていこうとするが、まだ相手の状況はわからない。しかしその中で彼らなりに着実に周りの人を知っていく。まずは大人、そして友達である。

△記録5▽

初めてクラスに入った日。B男は私に関心を示して、じっと見つめる。
(一九八五・五・一七)

△記録6▽

部屋に入っていくと、三、四人の子が寄ってくる。A男、私に抱きつきニコトとする。D男「あよ、あよ」（おはよう）。M子「うわあ」。B子、遠慮がちに体を引いてにこりと笑う。
(一九八五・五・二八)

△記録7▽

給食時、C男がM子の顔を両手にはさんで自分の方へ向け、正面を合わせてニッと笑いかける。M子の方は興味も示さず、全く気も使わず、すぐ顔をもとに戻す。再びC男が両手でM子の顔をぎゅつとはさんで自分のほうへ向け、顔をのぞき込みニッと笑いかける。どうも自分の方を向いてもらいたいらしいが通じない。
(一九八五・五・二二)

△記録8▽

いすの列車の中で、前後に乗り合わせたC男とL子。C男が突然ふりむいて、L子を笑わせる。ふりむくたびにL子が笑うので、C男が何度もくり返す。
(一九八五・一〇・四)

△記録9

E男、A子をくすぐって笑わせようとする。

(一九八六・三・二二)

これらの記録にはことがほとんどない。気持ちを表す言葉はまだ持っていないのである。かれらは他者に対する親しみの表現は笑顔に勝るものはないと思っっているかのようにある。

五、言葉と笑顔

F子は言葉が遅れていると先生方が心配されていた。その時F子は一歳九か月だったが、単語も出ていなかった。しかし私はそんなに心配はいらないのではないかと思っていた。というのは、この子は笑顔でやりとりができるのである。私はこの子の相手をするとき、言葉がないので困ったということはほとんどなく、言われてはじめてそういえば聞いたことがないと気がつくほどだった。

△記録10

F子とボール遊び。F子、にこにこしてサッカーボールを私に持ってくる。ボールのやり取りはできない。私は「F子」と声をかけて、ボールをころころ転がしてやり、F子に持ってくるように言う。するとF子はボールの後ろを一生懸命に走って、ボールに追いつき抱きかかえ、ニコニコ笑って私のところへ持ってくる。私は受け取りまた転がしてやり、それを追いかけてF子が走り、抱きかかえニコニコと持ってくるということを繰り返す。少しずつ変化をつけて繰り返していたが、そのうちに転がしてやったボールを別の子どもに取られてしまった。どうするかと思いつき待っている。F子はしばらくして、別の落ちていた破れボールを抱えて、ニコニコとうれしそうに私のところへ持ってきて差し出した。

(一九八五・一〇・二二)

△記録11

F子、隣のB子の顔をのぞき込んで、ニコニコニコニコと笑いかける。顔中で笑って両手をB子に差し出している。声

はない。

「おやつが欲しいとき手を差し出す。大人が「ちょうだい」と教え、言うように誘いかけるが、本人の方は声が出ない。

最後に手を上げて、「うー」。(一九八五・一一・一八)

翌年の二月になって声が出た。二歳一か月である。そしてその言葉は、「せんせー!」であった。しっかりと感情の込められた言葉だった。私はびっくりしてしまった。担任の先生に聞くと最近はつきりと言うとのことであった。その後のこの子の言葉には、私は感心させられることが多かった。四歳のときに、給食当番の子どもが食器を運ぶのに片手でやっているのを見て、「両手にし(なさい)」と落ち着いて相手の立場になって声をかけていた。

言葉は相手に話しかけるためにある。ただ自分の用事だけを言えばよいのではない。この子が言葉を持たなかったとき、相手の心に直接笑顔で話しかけていた姿が思い起こされる。早くから言葉を得ると、気持ちが言葉

に吸収されてしまうような気がする。用件は伝わるだろうけれど、気持ちはかげに隠れてしまうような気がする。彼らの精いっぱいの他者に向けられた笑顔にはぜひ心からこたえてやりたいと思う。

(山口大学教育学部助教授)

引用文献

- (1) 友定啓子「二歳児の笑いと保育」『保育学年報一九八六年版』日本保育学会、フレーベル館 一九八六
- (2) 林竹二『教育の根底にあるもの』径書房 一九八四